# 追悼・小野友貴枝さん

岡森 利幸

２０２２年１２月２７日、小野友貴枝さん永眠。83歳。

私が小野さんに最後にお会いしたのは、１２月３日。はだのこども館で机に向かっていた時、後ろから声をかけられた。「ひさしぶり」

小野さんは、ここの学習室を書斎として毎日のように来て、書類の処理やパソコン操作をしていた時期があった。大きな家に住んでいた彼女だから、場所がないからではなく、家では雑用が多すぎて集中できないからだと言い、バスを乗り継いで来ていた。私が訪れるのは２週間に一度程度だが、来れば彼女と顔を合わせた。このところ、それがあまり来なくなっていた。

私は、この数カ月前、共通の知人から、彼女が重篤な病を抱え、闘病していることを知らされていた。本人は私にはそのことで何も言わなかったし、外見からは、大きな変化はうかがい知れなかった。ただし、肌の色全体が茶色がかって、いつもの快活さがないことは、わかっていた。治療の副作用があったのか、とぐらいに思っていた。

夕方、私が車で来ていたのを知って、「帰るときいっしょに乗せて行ってほしい」と言った。私はもう少しここにいるつもりだったが、彼女の異変に気付き、早めに切り上げて帰ることにした。車の中で、よもやま話になったが、彼女の弱音がもれた。介護が必要な高齢の夫のことにふれたとき、「私のほうが先に死ぬかもしれない」と言ったことが私の記憶に残った。

そんな「先に死ぬ予感」があったとしても、まだ死は先のことだろうと彼女は思っていただろうし、私もそうだった。私はその月に、みなせに掲載予定の、すでにできていた原稿をもらうつもりでいたし、彼女もその意思を示していた。まだ締め切り日には間があり、〈そのうちに〉と思っていた。でも、それ以来、会うことはなく、連絡も取れなくなった。

訃報を聞いたとき、そのころ彼女は大学病院に入院していたことを知った。

最初の出会いも、はだのこども館だった。１０年程前のこと、私がロビーのテーブルを利用し、「みなせ」冊子の発送作業をしていた時、彼女は興味を示した。その最新版を一冊差し上げた。

彼女は少々厚かましい「おばさん」という印象だっ

たが、そのころ彼女も文芸誌（風恋洞）を、茂木光子（もてぎみつこ）の名で主宰していたから「同業者」であり、先輩格であることがわかってきた。私にとっては「お姉さん」的な人だった。

社交的なタイプで、誰にでも気兼ねなく話しかけ、聞くことのできる人だった。一つの部屋にいるのに、お互いムスッとして話もしないような雰囲気は好まないのだ。私なら絶対話しかけないような人物にも話しかけ、わけいって個人情報を聞き出すのも、一つの才能だろう。

けっこう一方的に話す人であり、私は多くの話を聞くことができた。一時期、昼食時に、彼女は弁当を持参していたにもかかわらず、私と近隣の食堂（地元ではよく知られたやなぎ家に行くことが多かった）に行って、食べながら一時間ほどの長話をしたりした。彼女の声は大きく、他の客に迷惑になったんではないか、と気になったほどだ。

一度、厚木の映画館に行って、八千草薫主演の「ゆずり葉の頃」の映画を見に行ったことがある。２０１５年１０月の頃だ。話題作に関心を持つ積極性があった。

彼女には自己主張の強さがあった。女は成人したら、職業を持って自立しなければいけない」という信念を持っていた。栃木県の農村の旧家で生まれ育ちながら、そのために東京に出て学び、神奈川で保健福祉分野の職を得た。学費が十分ではなく、自分でそれなりの経済的な工面をしてきた。結婚前は、相模原市の姉のところに居候をしていたという。結婚しても、専業主婦にはならず、働き続けた。３人の子を産み育てたが、養父母に子供の養育を任せた部分があったと思う。退職後、今度は娘たちのところに日帰りでその子どもの面倒を見たりしていた。孫の成長を見守っていた。

２０００年に定年退職しても、職と縁がすっぱり切れたわけでもなく、経験を生かして近年まで定期的な公的な会合に出ていた。家では主婦としての仕事をこなしていた。退職後も何かと忙しい彼女だったが、本格的に文芸を志し、その道に進んだ。広く情報発信をしたかったわけだろう。数年間、文筆の講座を受けて修行した。そこで同志と知り合ったりしていた。

彼女の書きたいことはたくさんあった。

・家族のこと

彼女の兄弟・姉妹は多く（９人）、それぞれの境遇、性格、生き様にも詳しい。自分の両親、義父母、自分の子供や孫についても、ネタが尽きない。

・自分の職業について
職場のこと。特に、年長者になって彼女は指導的立場で、旧弊のやり方の効率の悪さなどを指摘し、改善に力を入れた。彼女特有の着眼点の良さがあった。「社協を問う」の本にまとめた。
また、彼女には「大家」の顔もあった。空き地になっていた所有地に賃貸住宅を建て、経営していた。もっとも管理はほとんど不動産屋に任せていた。大家の視線で、店子たちをモデルにして物語を書いたりした。
・広い人脈
少女時代の級友から近所の人まで、よく人を観察していた。人脈が広く、職業柄、知り合った人たち（県庁や市庁関連の人も含む）とも、交流していた。隣近所・地域の付き合いも怠りなかった。ビールを飲みながら、話をするのが好きだった。
・男女関係・夫婦関係
性に関して開放的な考えを持つ人であり、なかなかあけすけな描写で、恋愛小説を書いてきた。夫婦関係にしても、ドメスティックバイオレンス（ＤＶ）を扱ったりして、誰がモデルなのか、興味が持たれた。「それでも私は離婚しない」と言ったりして、根性が座っていた。
・よく取材した
新聞を読むのが好きだと言っていた。
小説の背景として、地方の情景などを描くことがある。そんな場合、彼女は手抜きをせず（想像で書かず）現地に行って見聞きしていた。「見てきたようなこと」は書かなかった。取材でないかもしれないが、海外旅行にもよく行っていた。行動的だった。
・趣味の関係
合唱のサークルに所属し、月例の集まりに参加していたという。最近では、俳句に興味を持ち、句会に出ていたという。

私は、彼女の引き出しの多さには感心した。私の知らない面がまだ多くあったと思う。
自身の著作に関して、乞われて特定のグループの人たちに講演をしたことがあった。講師として一時間ほど話ができる人だった。
日ごろ思ったことを随筆にして（パソコンに打ち込む）ブログ「暮らしのノートＩＴＯ：作家・小野友貴枝の広場」としてネットで発信していた。原稿を管理人に渡すだけで、あとの手続きは任せるやり方だ。

見聞きしたいろいろな話を語っていた。でも、事実に基づいただけでは、小説として面白くないというジレンマがあったかもしれない。ある時、文芸仲間の会合で、ある評論家が小野さんの一作品について、そのことを指摘したとき、彼女は怒った。〈もう彼を呼ばなくていい！〉

自分の作品に思い入れがあったし、書籍を発行する意欲に燃えていた。彼女がぜひ映画化したいという作品もあった。できるだけ、本が売れるように、広告にも力を入れていた。本の表紙づくりにも関心を寄せ、デザイナーを指定していたりした。でも売れ行きは伸びず、目立った賞ももらえず、結局は、ほとんど無名の作家のままだった。

同人誌に関して、彼女とは文芸に関する路線の違いがあったようで、私と知り合ってからも、みなせとの合流をしばらく拒否していた。しかし、彼女の文芸同人誌の休刊が続いた後、ようやく２０２０年５月発行の第８６号から作品を連続的に掲載してくれた。彼女は条件を出してきたが、それは私のささいなこだわりだったから、妥協した。

ときには、相手に対して意に沿わないことで、いらだつことがあった。良い面ばかりではないのが人間だろう。自己主張の強さは、時に対立を招き、疎遠になった知人もいたという。「いいだしたら、きかない」ところがあった。

あるとき彼女は、異論を唱えた私に「がんこだ！」と言い放ったが、自分では柔軟な考え方をしていると思っていたから、ムッとして〈あなたに言われたくないよ！〉とは、口にしなかった。

そんな議論もできなくなり、その死を悼んでいる。

彼女の著書の主なところをキーワードを添えて紹介すると、

「愛の輪郭」日本文学館……恋愛
「愛の領域」（文庫版、那珂川慕情 改題）文芸社
「高円寺の家」文芸社……認知症、ＤＶ
「夢半ば Ⅰ～Ⅳ」文芸社……日記
「社協を問う」（副題：改革に挑んだ女性会長の物語）文芸社……職場、人間関係
「愛惜の記」文芸社（最新刊）……身内や知人の死